



# 他者との違いから学ぶことの必要性

## —『からすたろう』にみる資質・能力—

### 1 はじめに

---

2017年11月21日に、2015年の国際学習到達度調査 PISA (Programme for International Student Assessment) の「協同問題解決能力調査」の結果が公表された。

PISAは、経済協力開発機構 (OECD) が15歳児を

対象に「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の三分野について3年ごとに調査をしているものであるが、2015年には、革新分野として「協同問題解決能力調査」も行われた。日本は、調査に参加した全52か国・地域の中で2位、OECD加盟国32か国の中では1位の結果であった。この調査は、「ザンダー国」という架空の国の「地理」「人口」「経済」の三つの分野の問題に答えるコンテストに、コンピューター上の架空の

友人である「あかねさん」「三郎君」と自分との三人組で参加するという設定で、コンピューターで回答していくものである。例えば、誰がどの分野の問題に答えるかという役割分担を決める際に、あかねさんが「私は人口をやるわ。」と言い、三郎君も「ちょっと。それは僕がやりたかったのに。」と言う場面で、自分がどのように対応すればいいのかが問われる。

**選択肢1** 「誰も僕にやりたい分野を聞いてくれなかったじゃないか。なぜ、みんなが先に選ぶんだよ。」

**選択肢2** 「みんな、なぜその分野がいいのか説明してくれるかな。」

**選択肢3** 「こんなことで時間を無駄にしちゃダメだよ。」

**選択肢4** 「あかねさん、三郎君、分野を選ぶより、早く問題に答えてよ。」

という4つの選択肢のうち、正答は選択肢2である。この問題における日本の生徒の正答率は57.0%、OECD加盟国の生徒の平均は41.1%だった。

また、三人の担当を決めた後に、「人口」についての問題に答える担当のあかねさんが、「地理」の問題に答えて、「一つ正解したわ。この調子で行きましょう。」と言った際の対応としては、

**選択肢1** 「時間がないよ。チャットで時間を無駄にしないようにしようよ。」

**選択肢2** 「地理の問題に答えた人。よくやったね。」

**選択肢3** 「地理の問題は他の人が答えたから、僕は分野を変えるよ。」

**選択肢4** 「僕が地理の問題をやるはずだったのに。みんな、自分が選んだ分野をやろうよ。」

という4つのうち、正答は選択肢4であるが、日本の生徒の正答率は13.7%で、OECD平均の17.5%より低い結果となった。

これらの結果に対し、2017年11月23日の読売新聞は、「集団重視の学校文化が反映」「学校などで育まれた協調性が成果として表れた反面、相手を注意することが苦手な傾向もみられた」とし、「物事を荒立てずにうまく進めようとする日本人らしさの表れで、集団生活を重視する学校文化が反映されている。」という国立教育政策研

究所の担当者の見解と、「調査では、他者との違いから学び、問題を解きながら新たな問いを見いだすなど、他人と共に問題を解決するための重要な部分が測れていない。学校では、こうしたことを身につけさせることが必要だ」という東京大学の白水始教授の指摘を掲載している。この「他者との違いから学ぶことの必要性」ということばを受けて、筆者には思い起こされる一冊の絵本がある。八島太郎の『からすたろう』である。

## 2 『からすたろう』とは

『からすたろう』の作者である八島太郎は、1908年に鹿児島県に生まれるが、戦争に反対して1939年にアメリカに亡命し、1994年に亡くなるまでアメリカで活動が続けた作家である。日本語で書かれた『からすたろう』より先に、英語で書かれた『Crow Boy』を1955年に出版し、アメリカで最も権威ある絵本賞であるコルデコット賞次席に選ばれた。日本では、『からすたろう』が1979年に出版され、絵本にっぽん賞特別賞を受賞している。

『からすたろう』の舞台は村の小学校で、主人公は「ちび」と呼ばれる小さな男の子である。「ちび」の本当の名前は明らかにされておらず、「ちび」の他に「うすのろ」「とんま」「あほう」などと他の子どもたちから言われている。小学校の初日は、「ちび」が校舎の床下の暗い所に隠れているところから始まる。先生をこわがって勉強は何一つ覚えられず、クラスの友達とも全くなじめず、いつも一人ぼっちでいるちび。やがて、やぶにらみの目をするようになり、授業中は天井や机のふたや窓も外を眺めてすごし、休み時間は木陰で目をとじて耳をすましていろいろな音を聞いたり、ムカデやいもむしをつかまえてじっと見たりしている。クラスの子もただけでなく、年上や年下の子もたちからも馬鹿にされているちびだが、菜っ葉にくるまれた握り飯を持って、雨の日も嵐の日も、みのにくるまり、とほとほと歩いて学校にやってくる。

そんなちびを、ついに認めてくれる人物が現れる。六

年生の担任として赴任してきた「いそべ先生」だ。いそべ先生は、学校の裏の丘の上によく子どもたちを連れていき、ちびが、のぶどうや山いものあるところをよく知っているの、「ごきげん」になる。クラスの花壇づくりをするときも、ちびが花のことをよく知っているの、先生は「感心する」。先生は、ちびのかいた白黒の絵が「好き」でみんなに見せるために壁に貼りだしたり、ちびしか読めないような習字でも壁に貼りだした。まわりに誰もいないとき、ちびとふたりだけで話をするこもあった。ちびが家庭においてどのような存在であったのかはわからないが、少なくとも学校という場で、自分のために他者がごきげんになったり、感心したり、自分が創ったものを好きだと言ってくれたり、関心を持って話を聞いてくれるなどということは、ちびにとっては初めてのことだった。そして最後の学芸会で、ちびはからすの鳴き声を披露する。いそべ先生が、ちびがからすの鳴きまねをすると発表すると、子どもたちは、「なきごえだって?」「からすのなきごえだって?」「からすのなきごえだよ!」と口々に言ったが、ちびは舞台上に立ち、かえったばかりの赤ちゃんがらす、母さんがらす、父さんがらす、朝早く帰るからす、村の人に不幸があったときのからす、うれしくて楽しいときのからす、おしまいに、一本の古い木にとまっているからすの特別な鳴き声を演じ分けた。それを聞いた子どもたちは、「誰の心も、ちびが毎日通ってくる遠い山の方に連れてゆかれ」、「誰もかれも、ちびが住んでいる遠くてさみしいところをはっきりと想像することができた」。いそべ先生が、なぜちびがそれができるようになったのかを説明し、子どもたちは、日の出とともに家を出て、日没家に帰り着きながら、毎日毎日、一日も休まずに毎日学校に通ってきたちびのことを初めて理解した。そして、子どもたちは、六年間もの長い間、自分たちがちびにどんなにつらくあたたかさを思い出して泣いた。

ちびは、クラスでただ一人皆勤賞をもらって小学校を卒業した。もう「ちび」とは呼ばれず、「からすたろう」と呼ばれ、「自分でもその名前が気に入ったというようにうなずいてほほえむ」ようになる。最後の絵は、家族と一緒に焼いた炭を売りに山からまちにやってきたちびが、山での暮らしに必要な物を買って、「大人になりか

けた肩を自慢げに張って遠い山の家にかえってゆく」場面である。冒頭の絵では学校の床下の暗い所に隠れていた小さな男の子を、たった一人の先生が見出して、自分に誇りを持てるようになるまで導いた。いそべ先生だけが、ちびの持っている資質・能力に気がついたのである。どのような資質・能力も、周りの人間がそれに気づき、認めたり、ほめたりしてあげなければ、本人も周りの者も理解できないだろう。ちびの周りの子どもたちも心底悪気があったわけではない。ただそれまでちびのことを理解する機会がなかっただけなのである。

### 3 おわりに

平成29年10月26日に文部科学省初等中等教育局児童生徒課が公表した「平成28年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』(速報値)について」によれば、小・中学校における不登校児童生徒数は134,398人(前年度125,991人)で、全体の1.4%(前年度1.3%)にもなる。不登校の原因は様々であり、教員がすべてを解決するなどというのはおよそ現実的ではないが、『からすたろう』を読み返すたびに、教員の役割は何だろうかと考えさせられる。高い協調性を求められている学校生活の中で、それに疲れ果ててしまう子どもたち、こぼれ落ちてしまう子どもたちにも、それぞれの価値があり、生きていける道があることを知ってもらいたいと切に願う。

#### 参考文献

- 「OECD生徒の学習到達度調査 PISA2015年協同問題解決能力調査—国際結果の概要—」2017年11月21日 国立教育政策研究所
- 「国際学習到達度調査 集団重視の学校文化が反映」読売新聞 2017年11月23日
- 八島太郎(1979年5月1日初版、2016年8月64刷)『からすたろう』偕成社